
黒いサンタと弟子入り娘

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いサンタと弟子入り娘

【Nコード】

N4830P

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

黒いサンタⅡ黒岩三太郎に黒いサンタ候補生の女の子が見習いに付けられる。張り切る女の子に三太郎は迷惑顔。三太郎は「今年の悪い子」に目を付けた男の子にひどい罖を仕掛けて女の子にサンタ事務局へ「サンタ失格！」を訴えられそうになり、三太郎がたくらんだあくだいイタズラは？…………… 黒いサンタクロース2010

01 サンタクロース候補生！

黒くてでかくて角張っていてこわい顔をした謎の黒いセールスマン、黒岩三太郎（くろいわさんたろう）の正体は、ぶっちゃけちゃうと、黒いサンタクロースなのでありました。

サンタクロースと言えば赤いコートを着た白ひげ、大きなお腹をした、優しいおじいさんがパツと思い浮かぶでしょうが、それはよい子のための「赤いサンタクロース」。

実はサンタには「黒いサンタクロース」もいて、彼らは悪い子専門のこわいサンタクロースたちなのでした。

さて、「サンタクロースたち」と言うと、サンタクロースが何人もいるみたいですが、その通り、サンタクロースは実は何人もいるのです。12月になって街に出てみればあちこちに赤い服を着たサンタさんがいっぱいいますものね。いえいえ、彼らはおもちゃ屋さんやケーキ屋さんに雇われたアルバイトのお兄さんだったりするのがたいていですが、実は、彼らにまぎれてこっそり本物のサンタクロースがいるのかもしれませんが？

ま、それでもふつつ見かけるのは赤いサンタさんですね？ 黒いサンタはめったに見ることはありません。それもそのはず、彼らは赤いサンタの影に隠れてこっそり活動する「裏サンタ」たちなので、黒い服を着ていても一見サンタとは思えないかつこうをしているのです。だいたい、例えば日本の黒サンタである黒岩三太郎など、固い針金みたいな黒髪をして、定規で線を引いたみたいな目をして、見るからに凶悪そうなロシアのマフィアみたいな顔と体つきをしているのですから、よい子は一目見ただけで泣き出してしまいそうです。こんなのが裏の黒サンタとはいえ「サンタクロース」を名乗っているのですから笑っちゃいます。

さて黒岩三太郎は今、北極のサンタランドの事務局に呼び出されて来ています。このサンタランドには世界でただ一人の「オリジ

ナルのサンタクロース」が住んでいて、オリジナルのサンタクロースはともお年なので世界中を飛び回る厳しいサンタの仕事はともたいへんなので、サンタの仕事をするサンタクロース公認の「本物のサンタクロース」たちがたくさんいて、彼らはクリスマスまでの間、1年中せつせとここサンタランドの工場でもたちのプレゼントを作っているのです。

さてさて線を引っ張ったこわい顔の三太郎は仏頂面をして、せつせとそろそろ近くなってきたクリスマスのプレゼント作りに忙しい赤サンタたちなど見向きもせず、呼び出されたサンタ事務局の部屋へ入っていきました。

「このクソ忙しい時に俺を呼び出すとはなんの用だ？」

三太郎は不機嫌な重い声で白ひげのやせたおじいさんサンタに言いました。このおじいさんはサンタの仕事全体を取り仕切る事務局のえらくいサンタさんですが、このようにやせたサンタクロースもいるのです。優しいおじいさんサンタはでかい三太郎の無礼な口の聞き方にもニコニコして、一人の女の子を紹介しました。

「こちらはサンタクロース候補生で、黒いサンタクロースになることを希望している村上美月（むらかみつき）さん。君の見習いに付いてもらうから、よろしく頼みますよ」

「黒サンタの見習いだあゝあゝ？」

三太郎は思いつきり渋い顔で紹介された村上美月さんをにらむように見下ろしました。

村上美月さんは見たところ中学校の……1年生くらいのスマートな女の子でした。サンタクロースは普通の人間に比べてうんと長生きですが、それでもこうして年を取りますので、時々こうして新しいサンタクロースになってくれる若い人をスカウトするのです。どいういう人がサンタクロース候補に選ばれるかは……秘密です。美月さんは白い服とスカートをはいて、ものおじせずにニコリ、スカートのはしをつまんで、

「村上美月です。ミツキーって呼んでください」

とあいさつしました。三太郎はぶっきらぼうに

「呼ばねえよ」

と言いました。

「まったく、めんどくせーな」

三太郎はお行儀悪くボリボリ頭をかいて、嫌そうな顔で事務局の長官さんを見ました。おじいさんサンタはニコニコして

「三太郎くん。よろしく、おねがいしましたよ？」

と念押ししました。

「へえ〜い」

三太郎は仕方なく嫌々返事をしました。

「それでは美月さん。こちらの黒いサンタクロース、黒岩三太郎くんがあなたの先生になりますから、よく黒サンタのお仕事を習ってください」

「はい！」

美月さんは嬉しそうに元気よく返事をしました。

「黒岩先生。よろしくお願いしますー！」

元気におじぎをされて三太郎は

「ま、頑張ってくれや」

とめんどくさそうに言いました。

02 黒サンタ見習い！

美月さんはすその丸く広がったミニの黒いワンピースに着替え、黒サンタの気合いまんまんです。

それに比べて先生の三太郎は若い女の子の弟子をもてあまし気味にいかにもため息をついたそうな顔できました。

「おまえ、なんで黒サンタなんかになりたいんだ？ 女の子なら、かわいい赤サンタになりたがるものだろう？」

「うわあ、すごいすごい！」

と美月さんはおおはしゃぎ。二人は夜の空を三太郎の運転する空飛ぶリムジンのオープンカーで北極から日本へビューンと飛んで向かっているのです。現代のサンタたちはこうしていろいろな秘密道具を使っているのです。空の上はすごい寒さですが、サンタに支給される服はバッチリ寒さを防いで氷の世界だって平気です。美月さんは帽子の下から髪の毛を風になびかせていますが、その帽子も丸いつつ型で、女の子がかぶればなかなかかわいいですが、あまりサンタっぽくは見えません。

「おいこら、答えやがれ」

先生の三太郎が怒って言うと、美月さんはくりくりした丸い目を向けて言いました。

「黒いサンタって、悪い子をひどい目に合わせておしおきするんですよ？ わたし、悪い子をうんとおしおきしてやりたいんです！」

美月さんもかわいい顔をしてずいぶん恐ろしいことを言います。

「おまえは悪い子をおしおきしたくて黒サンタになりたいのか？」

「はい！ わたし本で読んだんですよ、黒いサンタって、悪い子にブタの血をふりかけたりするんですよね？」

美月さんは目をキラキラさせて意地悪に言いました。三太郎は呆れて言いました。

「そんなのはうんと昔の話だ。そんなサンタの評判を落とすような

汚ねえことは今はしねえよ」

「なーんだ、つまんないの。ね、先生、じゃあ今はどんなおしおきをするんですか？」

三太郎は口をへの字にしてうんと眉をよせました。

「どうもおめえは黒サンタの仕事を誤解しているようだな。そもそもそんな本当に悪い子のところになんか赤でも黒でもサンタクロースは行きやしねえよ」

美月さんは目をパチパチさせて首をかしげました。

「じゃあ黒サンタはどんな悪い子のところに行くんですか？」

「それはだなあー……」

三太郎はじいっと見つめる女の子の視線にへきえきして、

「自分で勉強しやがれ」

と言いました。

そんな風に話をしているうちに黒いオープンリムジンは都会のビル灯りの中に降りていき、ほどほどの高さのビルの屋上に着陸しました。オープカーに屋根が現れて、箱形の小さな部屋になりました。三太郎は一人車を降り、降りてこようとする美月さんを押しとどめて言いました。

「見習いはまず昼の仕事からだ。しばらくはこれがおまえさんの家だからな。ほれ、そのタッチパネルで風呂にも台所にもなるから、自分の面倒は自分で見やがれ」

前の座席の背もたれが前に倒れるとテーブルになって、ドアのところについている「あいぱっど」みたいなタッチパネルにお料理やシャワーの絵のボタンが表示されています。なんだか「どらえもん」に出てくる未来のキャンプ道具みたいですが、サンタクロースは常に世の中の動きを研究して最先端の道具を揃えているのです。

「へえー。サンタクロースっていい働き口ですね！」

美月さんはタッチパネルをどれにしようかなあと指で選びながら大喜びしました。

「こらこら、はしゃいで夜中遅くまで衛星テレビなんか見てるんじ

やねえぞ」

「うわあ！ テレビも付いてるんですね！」

「さっさと風呂入って寝ろ！」

三太郎はのっしのっし黒い背中を見せて歩いていき、屋上のドアを開けてビルの中へ入っていきました。

03 おしおきよ！

翌日の午後、三太郎と美月は学校が終わる時間を見計らって小学校のまわりをぶらぶら歩きました。

「おまえが黒サンタに向いてるかどうかテストしてやる」

三太郎は美月にアニメの魔法少女みたいなパステルカラーのファッションなステッキを渡しました。

「マジカルステッキ黒サンタ仕様だ。1から3、MAXまで4段階でそれをふった相手に災難をふりかけることができる。例えばだ、ほれ、あそこにタバコを吸っている不良高校生がいる」

なるほど、頭をリーゼントで固めて肩を怒らせた見るからに不良の高校生が往来をどうとタバコを吹かしながら歩いてきます。まるで昭和のギャグマンガに出てくるような分かりやすい不良ですが、下校する小学生たちは怖がって道のりようわきによけていきます。

「ま、あんな小物、レベル2くらいでよからう」

美月は「2」のボタンを押しました。見た目はかわいいのにジャアーン……とオルガンの不気味な音が出ました。

「あいつに向けてふってみろ」

「マジカルブラックシャワー！」

えいっ！と美月は歩いてくる不良高校生向かってステッキをふりました。するとステッキの先から黒い星が飛び出して不良学生の胸に命中しました。

「あん？ なんだあ？」

不良学生は胸を手ではらってじろつと美月をにらみました。

「なんだてめえ、文句あんのかこらあ！」

不良学生の怒った声に美月はビクツと震え上がりましたが、そのとなりの三太郎がギロツとにらむと不良学生もビクツと体を引き、「な、なんだバカヤロ」

と強がりでしたが声がバカ殿みたいに震えていました。ウーウーとサイレンを響かせて学校前の細い通りを大きな白バイが走ってきて不良学生の前で止まりました。

「往来での喫煙は市の条令で禁止されている。逮捕して保険センタ―喫煙健康被害教育プログラムへ連行する」

不良学生は白バイのお巡りさんにガチャリと手錠をかけられ、びっくりした顔で白バイの後ろに乗つけられると、白バイはブロロロロンとエンジンを吹かして猛スピードで去っていきました。ひいひい、お助けえひいひい……、と、不良学生の悲鳴があつと言う間に遠ざかっていきます。小学生たちはポカンとしてながめていましたが、ま、悪いお兄ちゃんが正義の白バイ隊員に連れて行かれたのでよかったよかったとうなずきあつて仲良くおしゃべりしながら歩き出しました。

美月は白バイの去っていった方を指さして三太郎にききました。

「あれでレベル2？」

「ま、あんなものだろう」

と三太郎はうなずきました。

「手錠をはめて白バイに二人乗りつて、思いっきり交通ルール違反のような気がするけど？」

「サントのやるファンタジーだ。気にするな」

「ふうーん、サントつてすごい力があるのね」

「おっと、注意しておくぞ。俺たち黒サントは影の存在だ。くれぐれも目立たないようにな」

「目立つなって……」

小学生たちは見るからに怪しい黒ずくめのでこぼこ二人組を見てひそひそ話してます。

『あれって黒の組織じゃないか？』

『チビの方はきつと薬で子どもに変装してるんだぜ？』

『違うよ、ただのロシア人のジャパニメーションマニアだよ。ぷりゅあのおもちや持つてるじゃん？』

美月は目立つパステルカラーのステッキを持つてるのが急に恥ずかしくなって真っ赤になりました。ノリノリで呪文付きでふっちゃんしました。美月は恥ずかしさを三太郎への文句にぶつけました。

「目立つなって言っておきながらこのステッキはないでしょう!？
こんなのふったら思いっきり目立つちゃうじゃない!？　せめて黒サントラしく黒にしてよ!！」

三太郎は美月を見下ろして平気で言いました。

「子どもがおもちゃで遊んでるみてえでいいじゃねえか？　ちなみに呪文を唱えなくてもふるだけで魔法は発動するからな」

美月は恥ずかしさでますます真っ赤になりました。

「ほれ行くぞ。今度はおまえが自分で悪い子を見つけて災難をふりかけてやるんだ」

04 見習いテスト！

三太郎と美月が歩いていると友だちの分まで4つもランドセルを持たされている男の子がいました。ランドセルを持たせている男の子たちは「ほらほらしっかり歩けよ」とよたよた歩く体の小さな男の子を笑いながらはやしたてています。

「悪い子たちね！」

美月は張り切ってステッキをかまえました。三太郎は

「ありゃあジャンケンでゲームをしてるんだろう？」

と言いましたが、美月はジロツと三太郎をにらんで、今度はこっそり「えい！」と小さくステッキをふりました。ステッキの先から黒い星がビュンビュン飛んでいつて4人の男の子たちの胸に命中していきました。するとエコバッグにいっぱい買い物をつめこんだお母さんたちがものすごい早足でやってきました。

「わっ、母ちゃん？！」

あまりの勢いに気おされて棒立ちの男の子の頭を母ちゃんはポカリとなぐりました。

「こらっ！ 友だちにランドセルなんて持たせて何やってるの！」

「イってー！ー！」

男の子は頭を押さえて母ちゃんに文句を言いました。

「ジャンケンで負けたからだよお。その前の電信柱まではオレが持ってたんだぜ！？」

「口答えするんじゃないやありません！」

母ちゃんはまた男の子をポカリとなぐると、ランドセルを持たされている男の子のところにスタスタ歩いていき、

「オホホホ、ごめんなさいねえー？」

とランドセルを1つ取ると自分の息子のところにスタスタ戻り、

「ほら、帰って宿題！」

と、ランドセルを押し付け、耳を引っ張ってスタスタ早足で歩き

ました。他の3人の男の子たちも同様にお母さんたちからポカポカたたかれて「オホホホ」と受け取ったランドセルを押し付けられ、耳やえりくびを引っ張られて連れて行かれました。

「あっ！ お、おい、母ちゃん、これオレのランドセルじゃないよお〜」

「ランドセルなんてみんなおんなじでしょう！」

「ぜんぜん違うよお〜！！！」

男の子たちは悲鳴を上げながらものすごい勢いでお母さんたちに連れて行かれてしまいました。一人取り残されたランドセルを持たされていた男の子は、

「あ、これ僕のじゃない。お、おお〜い！ 僕のランドセルう〜〜〜！！！」

と、4人の誰かを追ってあわてて走っていきました。

三太郎は線みたいな目を思いつき細めて、美月はかわいい目を点にして見送りました。

「あ、あれ？ 今のレベル1だった？」

「ああ。そのステッキは1回ごとにリセットされるからな」

「へ、へえー。じゃあレベル1であれくらいなわけね」

と、美月は感心したふりをしてごまかしました。

「ま、じゃあ次の悪い子を探すか」

「そ、そうしましょう！」

レッツゴー！と美月はステッキをふり上げて張り切って歩き出しました。

歩いていくと商店街に入り、おもちゃ屋の前に男の子たちが集まって、今買ってきたカードバトルゲームのパックの中身を調べ、カードのトレーディングをしているようです。

「あっ！ ガラモンのQバージョンじゃん！ トレードしようぜ？！」

「う〜ん、やだ。おまえろくなの持ってねーじゃん」

「ほしい！ 頼むよお、2枚！ いや3枚でどうだ！？」

「やーだねー」

「ええ、いい、おのれええ」

その子はどうしてもそのカードがほしくてあきらめきれないよう
で、もう1パックカードを買ったため財布の中身を確かめました
が、どうやらおこづかいはずつかりなくなってしまったようで、すると
男の子は仲間のうちのお金持ちっぽいトラッドな服の子に言いまし
た。

「なあ、100円めぐんでくんない？」

柱のかげからこっそり見ていた美月は張り切って言いました。

「カツアゲだわ！ すごく悪い子ね！」

美月は今度は忘れずレベル2のボタンを押しました。ジャアー
ン……と不気味にオルガンの音が鳴ります。美月は「えいっ！」と
ステッキをふりました。

トラッドの男の子は

「それよりボクのメフィラス星人と君のセミンジャ星人をトレ
ードしないか？」

「あつ、メフィラスならオレほしい！」

「じゃ、ガラモンとメフィラスとセミンジャをそれぞれトレード
ってことで、」

「トレード成立！」

と、男の子たちは仲良く交渉成立したようですが、あらもう遅
い、ステッキから発射された黒い星は100円をねだった男の子の
胸に命中してしまいました。

おもちゃ屋のとなりのお団子屋からみたらし団子をほおばりなが
ら中年の男の人が現れました。

「あつ、先生！」

思わず声を上げた男の子はしまった！と慌てて口を閉じましたが
もう手遅れ。先生は生徒たちを見つけて、

「こらっ！」

としかりました。

「学校の帰り道におもちや屋に入っではいかんと指導してるだろう？ これは全部ぼつしゅう！」

男の子たちはみんな買ったばかりのカードを先生に全部取り上げられてしまいました。

「きつたねーの、自分だつて団子買い食いしてるくせにい〜」

「大人はいいんだ。これは明日、お母さんたちに取りに来てもらうからな」

「はあ〜〜〜い」

男の子たちは思いつきり不満そうに返事し、団子をほおぼり意気ようようと去っていく先生の背中を恨めしそうに見つめ、こつちを見ている変な黒い服のお姉ちゃんをジロツと見ました。美月は慌てて三太郎のかげに隠れました。

「ま、まあ、学校の帰り道におもちや屋に寄り道してたんだから悪い子たちよ……ね？……………」

三太郎は呆れた様子で、

「ま、次行くか」

と歩き出し、美月もちよこちよこ歩いて続けました。

05 テスト続き！

三太郎と美月は学校帰りの小学生たちを見張りながら商店街のパトロールを続けました。すると、商店街は自動車の通行は禁止されているのですが、自転車に乗った男の子たちの集団が猛スピードで走ってきました。小回りのきく小さなタイヤをあやつって器用に通行人たちをよけて走りますが、それにしても危ない！ 一人が急ハンドルで人をよけると、後に続いて走ってきた男の子は突然目の前に現れた通行人にびっくりして本当にギリギリでよけて、それでもスピードを落とさずに走り続けました。

三太郎は眉をひそめて、

「こいつはちつとおしおきが必要だな」

と言いました。美月は待ってました！とステッキをかまえ、レベル3のボタン押して「えいっ！ えいっ！ えいっ！」とステッキをふっていきました。星がビュンビュン飛んでいって、少年たちの胸に命中しました。

ビュウツと木枯らしが吹き、飛んできた白い買い物袋が先頭を走っていた少年の顔におおいかぶさりました。少年は驚き、ハンドル操作をあやまつて休憩用のベンチにぶつかって弾かれ、横倒しになる自転車からポーンと吹っ飛ばされました。後ろに続いて猛スピードで走っていた少年たちは慌てて急ブレーキをかけましたが倒れた自転車にぶつかり、次々ポーン、ポーン、と宙に吹っ飛ばされました。

「わあーーーーっ……！」

と悲鳴を上げる少年たちは、ものすごいスピードで駆けていった三太郎に危機一髪、次々キャッチされていきました。三太郎がキャッチした5人をまとめてアスファルトの上に下ろしてやると少年たちは真っ青な顔で

「あ、ありがとう……」

とお礼を言いました。でも三太郎はものすごい大声で、

「こおの、バカヤロウどもおーーーーーっ!!!!!!」

こんなせめえ人の歩いているところでスピード出して自転車乗り回してんじゃねえつつつ!!!!!!」

と叱りつけました。少年たちはビクウツツと震え上がると、あまりの怖さにギャーーーーーッと大声を上げて泣き出しました。

「ふんっ」

三太郎は鼻息荒くふんぞり返ると、のっしのっしと歩き去りました。美月も怖い顔の三太郎が本気で怒ったものすごい怖さにビビりながらこそこそ後を追いかけてきました。

三太郎と美月は商店街を抜けてふつうの家が並ぶ通りを歩いていました。

すると、小路（こうじ）の入り口で女の子たちが突っ立ってなにやらとげとげしい様子です。どうやら口げんかをしているようですが、向こうの一人に対してこちらは三人です。向こうの女の子は口をとがらせて、目に涙を浮かべて、こちらの女の子たちにののしられながらじっと悔しそうにうつむいています。

「一人を三人がかりで攻撃するなんて許せない！ ひどい悪い子たちだわ！」

美月はステッキのMAXボタンを押し、ふりかぶりました。

その手を三太郎の大きな手がつかみました。

「もういい。テストはここまでだ。帰るぞ」

美月は悪い子たちを前に不満です。

「あの子たちをおしおきしてから帰りましょう?」

三太郎は面倒くさそうに言いました。

「あんなのは放っておけ。さあ、帰るんだ」

と、三太郎は美月を軽々引きずって女の子たちから離れました。

06 異議あり！

三太郎は夜になるとリムジンホテルを空飛ぶオープンカーにトランスフォームさせて北極のサンタランドに戻り、美月を連れて事務局に行く、

「こいつはサンタにや向いてねえ。黒サンタ見習い失格だ」

と、びっくりする美月を置き去りにしてさっさと出ていき、リムジンジェットカーに乗って飛び去ってしまいました。

さて数日後、三太郎はまた呼び出されてサンタ事務局にやってきました。

そこには白ひげのやせた優しそうな局長サンタと、プンブン怒った美月が待っていました。三太郎はまたうんざりした顔をしました。局長サンタが言いました。

「こりや三太郎。先生の役目を放り出して生徒を置き去りにするとは何ごとだ」

三太郎は、

「ですから、こいつはサンタにや向いてねえと言ったでやんしょ？」
と言いつきました。すると美月が

「わたしのどこが悪いって言うのよ！？」

とプンブン怒りました。局長サンタはまあまあと美月を落ち着かせ、三太郎に言いました。

「とまあ、このように美月くんから異議申し立てを受けてな、事務局で協議の結果、異議を受け入れ、彼女を黒サンタ見習いに復帰させることに決定した」

三太郎はボソッと

「向いてねえと思うがなあ……」

と、文句を言いましたが、局長サンタに

「われらが聖サンタクロースも承知しておる」

と言われてむっとり黙りました。聖サンタクロースとはオリジナルの本物の本物のサンタクロースのことです。

「ではよろしく。二人とも仲良くな」

局長サンタはニコニコ手をふりましたが、今度は美月が不満を言いました。

「黒サンタって黒岩先生の他にもいるんでしょう？ わたし、他の黒サンタの先生がいいです」

ツンとすまして言う美月に三太郎も

「おうおう、いいぜ、他の黒サンタに引き受けてもらいな」

と憎まれ口を言いました。局長サンタは三太郎を「これ！」とばかり、美月にも言いました。

「こんなやつでもこいつは立派な黒いサンタクロースだ。三太郎先生がいやなら、君の異議申し立てを却下して、黒サンタ見習いを失格とする。それでもよいかな？」

美月は渋々

「はあ~~~~い」

と返事し、

「黒岩三太郎先生え、よろしくおねがいしまあーす」と頭を下げました。

「あゝあゝ、しょうがねえなあー……」

思いつきり面倒くさそうに言う三太郎に美月はこっそり

「ちっ、」

と舌打ちしました。

07 悪い子見つけた！

日本に帰る道すがら、三太郎は迷惑そうに言いました。

「まったく誰かさんのせいでスケジュールが大狂いだぜ」

クリスマスもいよいよ1週間後に迫って、いつもならもうそろそろ三太郎はトナカイの顔をした怪しげな「ドリームマシーン」を悪い子の家にセールスしている頃なのですが、今年はどうもこれと見込みのある悪い子を見つけられずにいるようです。

「先生、しつもん！」

と美月は手を上げて言いました。三太郎は面倒くさそうに

「なんだね、美月くん」

と指名しました。

「先生はどんな基準で悪い子を決めているんですか？」

「そんなことあ自分で考え……」

三太郎は面倒くさそうな顔をしながらしうがなく先生らしく教えてやりました。

「本当はいい子の悪い子、または、本当はいい子になりたがっている悪い子を選ぶのさ」

と言いましたが、自分で言っておきながら三太郎ははて？と腕を組んで考えました。

「そっじゃねえかなあ？ 本当は悪い子のいい子かなあ？」

美月は本当にこの先生でかいじょうぶかしらと怪しむ目で三太郎を見て言いました。

「先生ももう一度サンタになる試験を受け直した方がいいんじゃないですかあ？」

三太郎はむつつりして言いました。

「ええーい、うるさい。俺様が悪い子と決めたらそいつが今年の悪い子なんだ！」

美月は呆れて言いました。

「なにそれ？ それじゃあ悪い子に選ばれた子は悪い宝くじに当たったようなものね？」

三太郎はその言葉が気に入ったらしく白い歯を見せてニンマリ笑いました。

「そのとおりだな。そいつは大当たりだ」

あきれ返る美月に悪びれもせず三太郎は「わはははは」と大笑いしました。

さて翌日の午後。

三太郎は美月を連れて児童公園に来ていました。

入り口の門のかげにきゅうくつに隠れながら三太郎は言いました。「見る、小学生の坊主が一人いるだろう？」

木枯らしの吹くもの寂しい公園に一人きりでつまらなそうにブランコに乗っている男の子がいます。美月はうなずき、ききました。

「あの子、悪い子なの？」

三太郎はニンマリ悪そうな顔で笑って言いました。

「ああ、そうとも。あいつはすげえ悪い子なのだ」

美月は三太郎の悪そうな顔を怪しみ、本当かなあ？と少年を見ました。

「あいつは正木正直（まさきまさなお）、小学6年生だ。今一人で公園にいるのは友だちがゲームで遊んでいる仲間に入れてもらえないからだ」

「なんで？」

「ゲーム機を持っていないからさ。他の男の子たちはみんなゲーム機を持っていて、通信機能でつながって同じゲームを楽しんでいるのさ。だがマサキ少年はゲームを持っていないから仲間に入れてもらえないってわけだ」

「まあかわいそう」

美月は同情して言いました。三太郎はニンマリして、

「そうだよなあ、かわいそうだよなあ？ だから心優しいサンタさんが少年にプレゼントしてやるのさ」

と言うと、バサツと黒いコートをひるがえし、あっという間に赤いサンタクロースに変身しました！ ……ごわごわの黒ひげはそのままでものすごく人相の悪いサンタクロースですが。美月は驚いてきました。

「黒サンタも赤いサンタクロースになるの？」

「まっ、時と場合によってな」

「でも、プレゼントならクリスマススイブにすればいいじゃない？」

それがサンタクロースのルールでしょう？」

「俺は不良サンタだからルールなんて守らねえんだよ」

やたらと肩幅の広い角張ったサンタはむんずとプレゼントの入った大袋を手につかみ、ズンズン公園に入っていきました。美月はそのまま門のかけからなりゆきを見守ります。

公園の真ん中に立った大きな悪人サンタは周りをきよろきよろし、いかにも怪しいサンタにびっくりしているマサキ少年と目を合わせ、ニンマリ笑いました。マサキ少年は慌てて目をそらしましたが、悪人サンタに恐ろしい笑顔で手まねかれて仕方なくブランコを下りてやってきました。悪人サンタはマサキくんが逃げないようにしっかりと見張りながらベンチへまねきました。

三太郎はベンチにプレゼントの袋をおいてマサキくんに言いました。

「坊や。悪いがここでこの袋を見張っていてくれないか？ おじさんはトイレに用足しに行きたいんだ。頼むよ」

公園には公衆トイレがあります。小さくてあんまりきれいなトイレではないので、白い袋を汚したくないのかなとマサキくんは思いました。

「いいよ。じゃあここで待ってるよ」

「おお、ありがとう！ よろしく頼むよ。サンタクロースに親切にしたんだ、君にはきつととってもいいことがあるよ？」

三太郎はニイツと笑ってトイレに向かいました。マサキくんは愛想笑い（あいそわらい）で見送りましたが、こんな悪そうな偽者サンの言うことなんてぜんぜん信じてません。

三太郎は小の便器ではなくて大の個室に入りました。そしてそのままなかなか出てきません。5分以上待つて、10分も待つて、マサキくんはだんだんイライラして、心配になってきました。どう見ても悪人顔のサンタでしたから、ひょっとして、この袋の中には爆弾でも入っているんじゃないか？と怖くなりました。袋はぺちゃんこで、そんなに大きな物が入っていません。いつまで待つても出てこないサンタクロースに、ちよつとだけ、と、マサキくんは袋の口を開けて中をそつとのぞきました。

「あつ！」

とマサキくんはびっくりしました。そこにはマサキくんが欲しくて欲しくてたまらない、でーえすのゲーム機の箱が入っていたのです！ しかもカードがそえてあつて、「心やさしいサンタクロースからよい子へプレゼント」と書かれています。マサキくんはまさか！と顔を輝かせ、急いで

「サンタクロースのおじさん！」

と呼んでトイレに駆け込みました。個室のカギは開いていて、マサキくんが思いきつて開けるときつたないトイレには誰も入っていませんでした。入り口はずつと見ていて、他に出口はないのに不思議です。マサキくんはぼーとした頭で考えました。

「まさか……、本当に本物のサンタクロース？ …………… あれが……？」

夢を見ているようですが、ベンチにおかれた袋の中には確かにでーえすゲーム機が入っているのです。

不思議そうになっているマサキ少年を黒いかつこうに戻った三太郎は門のかげからニヤニヤしながらめていました。三太郎はサンタクロースに支給される秘密道具「お勝手裏口」でこっそりトイレの裏から抜け出していたのです。

「黒岩先生。黒サンのくせにいいところあるじゃない？」

ニコニコ見上げる美月に三太郎は

「そつだろつそつだろつ、俺は実はいいサンタクロースなのだ」と、ニンマリ、笑いました。

08 腹黒サンタ！

正木正直（まさきまさなお）くんはサンタクロースから預かった袋を交番に届けました。もちろん中身のでいーえすそのままです。交番から出てきたマサキくんはとぼとぼ歩き、

「はあ~~~~~」

と、すぐがっかりしたため息をつきました。

こっそり後をつけていた美月は意外な成りゆきにぼうぜんとしました。後ろで三太郎は「ちっ」と舌打ちしました。

「なんだよ、子どもらしくねーガキだなあ、バカ正直に交番に届けやがって、あの正直（しょうじき）太郎め。ネコババしたら家に乗り込んでいって子分にしてくき使ってやろうと思ったのによ、あーあ、嫌なガキだぜ」

それを聞いて美月はふんがいました。

「なんてひどい人なの！ あなたよくそれでサンタクロースを名乗れるわね！？」

三太郎はフン！と不機嫌にあごをそらして言いました。

「俺はサンタクロースじゃねえ、黒いサンタクロースだ」

「白でも黒でも、あんたなんかサンタクロース失格よ！ サンタ事務局に訴えてやるんだから、この、サンタの面汚しの、極悪人！！」

美月は三太郎を怒りつつ、マサキ少年の後ろ姿を心配そうに見守りました。しょんぼりして、本当はすぐ自分の物にしたかったに違いありません。美月は胸が痛んで、キッと三太郎を見上げると言いました。

「あの子は正直にいいことをしたんだからご褒美をもらえるべきだわ！」

三太郎は平気な顔で憎らしく言いました。

「ああそうだな。じゃあクリスマススイブには赤いサンタがさぞかしすばらしいプレゼントをしてくれることだろうぜ。ま、俺の仕事じ

やねえや」

美月はキーンツと悔しがり、先を歩いていくマサキくんの後を追いました。三太郎が呼びかけました。

「おい。あのガキは見込み違いだ。俺はいい子なんかにや用はねえぞー」

美月はくるつと振り返ると、アツカンベー！とやって、

「絶つつつ対、訴えてやるんだからあつ！」

と言ってマサキくんの後を追いつけました。三太郎はむつつりした顔で固いごわごわの髪の毛をかき、

「ええい、ちくしょう」

といまいましそうにのっしのっし後に続いて歩きました。

マサキくんは小学校の近くの児童館にやってきました。その入り口の階段で、中に入らずクラスの友だちが3人、でいーえすを通信でつないでモンスター退治のアクションゲームを楽しんでいました。3人でチームを組んでモンスターをやつつけるのです。マサキくんがやってきたのに気づくと顔も上げずにゲームに熱中しながら一人が言いました。

「よう、シヨウジキ。でいーえすは買ってもらえそうか？」

マサキくんは少し離れてうらやましそうにながめながら言いました。

「分かんない。でも、うち貧乏だから……」

あつ、ちくしょう、こいつ手強いぞ、抜かるなよ？、とゲームに熱中しながら、友だちは思いだしたようにマサキくんに言いました。「へー……。じゃあおまえなんか仲間じゃねえや。気が散るからあつち行けよ……。あつ、くそ、このやろっ！」

友だちはゲームに熱中し、マサキくんは寂しそうな顔で立ち去るうとしましたが、やっぱりゲームが楽しそうで、いじいじと友だちが熱中する様子をながめていました。

美月はプンプン怒りました。

「あの子たちは友だちを仲間はずれにする悪い子たちだわ！ 先生、おしおきステッキ貸して！」

「マジカルステッキだ。あれはおまえに渡すと危ねえからもう貸さ
ん」

美月はムツとにらんで、

「サンタ事務局う〜」

と三太郎を脅迫しました。三太郎は嫌な顔をして、

「しょうがねえ悪たれ見習いだなあ」

とこぼしながら、黒いセールスカバンからシルバーブラックの
いーえすゲーム機を取り出しました。

「ほらよ。これはゲームしかできねえが、使いようによっちゃじゅ
うぶんガキどもにおしおきできるぜ？」

美月はゲーム機を受け取りニンマリ三太郎みたいに笑いました。

美月は男の子たちのところへ歩いていき、

「君たちー、お姉さんも仲間に入れてよ？」

と、かっこいいシルバーブラックのゲーム機を見せました。ちょ
うどバトルを終えた男の子たちは美月のゲーム機に目を輝かせまし
た。

「かつちよいー！ そんなでいーえす売ってたっけ？」

美月はフンとあごをそらし、

「非売品の特別製よ」

と自慢しました。

「お姉さん強いよお〜？ 対戦バトルしようよ？ お姉さん一人で、
そっちは三人がかりでいいよ？ もしお姉さんに勝ったらこのゲー
ム機貸してあげる」

三人は顔を見合わせ、ニンマリしました。

「オレたちを舐めてもらっちゃこまるなあー？ ま、いいぜ、軽
く返り討ちにしてやるよ」

「よーし、バトル決定！」

美月と三人はでいーえすをネットさせて自分の操るキャラクター

を出現させました。男の子たちは美月の出現させたキャラクターを見て驚きました。

「ドラゴン大帝アルテミラじゃん！！？？　こんなの自分のキャラにできるのかよお？？？？」

驚いている三人に美月は得意になって自慢しました。

「秘密の裏技があるのよ。いいでしょお？？」

美月はうらやましそうにのぞいているマサキくんをおいでおいでと手招きしました。

「お姉さんが三人をめちゃくちゃんにやつつけるところをよく見てなさい」

三人はたいして大人でもない美月にお姉さんぶられて面白くなく、三人顔を見合わせてうなずき合い、顔をひきしめました。

「よしっ、バトルしようぜ！」

09 見習いの失敗！

「あつ、うわつ、わつわつ、ち、ちくしょう、そんなのありかよ、あつ！、ああ……」

1対3のバトルは圧倒的な力の差で美月のドラゴン大帝が三人の強化戦士をめっちゃくちゃ、ぎっとんぎっとんにやつつけていきました。三人は見事なチームプレイで攻撃をしかけていくのですが、キャラクターの力に差があります。

「あ……あ……」

と完敗した三人ですが、美月のおしおきはそれですみませんでした。勝利したドラゴン大帝は炎の剣をふりまわし、三人のゲーム機のディスプレイを真つ赤な火事になると、真つ黒に燃え尽きて、ゲームオーバーになってしまいました。

「え？　なんだこれ？」

と、見慣れない画面にデータを確認すると、それまでバトルを重ねて強化してきた戦士が、最初のスタートの状態に戻っていました。「わあーっ、データが全部消えてるうう……っ！！！！」

男の子たちは悲鳴を上げ、完全にデータが消えてしまっているのを確認すると顔を真つ赤にしてうらめしい目で美月をにらみました。「ひでえじゃねえかよお！？　ウィルスを送り込みやがったな？！」フンと美月は鼻高々で大いばりました。

「あんたたちがお友だちを仲間はずれにしているからおしおきしてやったのよ」

「シヨウジキ……、こいつおまえの姉ちゃんかよ？」

マサキくんは慌てて手をふりました。

「ちがうよお、ぜんぜん知らない人だよお」

三人は泣きそうに怒った顔で美月をにらみましたが、後ろにいるお父さんらしいでかい黒コートの男に悔しそうに黙り込みました。

「もついい。ちつくしょう、ぜんぜん面白くねーよ。おい、行こう

ぜ」

三人は立ち上がり、美月からフンツと顔をそらし、階段を下りていきました。美月はざまあみると笑って、後ろで突っ立っているマサキくんニツコリ笑いかけました。

「これ、あげる」

マサキくんは

「えっ！」

と驚き、階段を下りた三人も驚いてふりかえりました。

「はい、どうぞ」

「い、いいよ、こんな高い物もらえないよ」

マサキくんは断りましたが美月はいいからいいからと押し付け、強引に受け取らせました。

「わたしはあんまりゲームって好きじゃないの。いらないから君にあげる。じゃあねー」

美月はさつさと階段を下り、ご機嫌でバイバイと手をふり、フンと負け犬三人の横をすまして通って歩いていきました。

ゲーム機を受け取られたマサキくんは困ってしまつて三太郎を見ました。三太郎は

「あいつが君にあげたんだ。好きにしな」

と言つて立ち去りました。マサキくんはゲーム機を持って立ち尽くし、階段下の三人は、

「行こうぜ」

と不機嫌な顔で行つてしまいました。

翌日午後、美月は三太郎に連れられて児童館にやってきました。入り口の階段にマサキくんが腰かけていて、美月を見つけると笑顔で立ち上がり、走り寄ってきました。マサキくんは三太郎にあいさつし、美月にきのうもらったでいーえすのゲーム機を差し出しました。

「これ、返すよ」

美月は、

「いいわよ。これは君にあげたんだから」

と押し返そうとしましたが、今度は美月がマサキくんにしつかり受け取らされました。

「やっぱもらえないよ。」

昨日あれから家に帰ってこれで遊んでいたらお母さんにしかられたんだ。もらったって言ったんだけど、返してきなさい！って怒られて、それからまたここに帰ってきて君をさがしたんだけど見つからなくて、今日会えてほつとしたよ。ありがとうね、ちょっとだけだったけど、ゲームできて、すごく面白かったよ！」

マサキくんはまた三太郎にあいさつして、

「それじゃあねえ」

と手をふって走っていきました。

「あげたのに……………」

美月はでいーえすを胸にかかえて、走っていくマサキくんの後ろ姿を見つめました。

「まったく、どうしようもねえいい子ちゃんのバカ正直ものだな」

美月は三太郎をにらんできました。

「わたしをここに連れてきたのは、あの子がわたしをさがしているって知っていたのね？」

三太郎は「フン」と鼻を鳴らし、重たい声で言いました。

「おめえが言ったとおりだ、本物のサンタに出会えるなんてなあ宝くじに当たるようなものだ。つまりサンタに会いたくても会えねえ子どもが世界にやたあくさんいるってことだ。あいつにやあ立派なお父さんお母さんがいる。俺たちサンタのやらなきやらねえ仕事は他にあるってこった」

美月は自分にでいーえすを突き返したマサキくんの顔を思い出し、さすがに自分の失敗を思い知りましたが、でも、『でも！』と反発しました。美月は三太郎をにらんできつく言いました。

「もとはと言えば先生がやったことじゃない!? あの子にプレゼントをあげるようなまねをして、悲しい思いをさせて、先生のせいじゃないのよおっ?!」

「なんだよ、自分の失敗を俺のせいにするなよ」

美月は真っ赤になつてキーーッ!と怒りました。

「先生が悪ーーーーい!!! なんとかしなさい! じゃないとおくく、事務局に訴えるわよっ!?!」

「また事務局だのみかよ」

「訴えるわよっ!?!」

「わあーーーーった。分かりやした。クリスマスイブにはなんとかしてやる! それでいいだろう?」

「はい!」

美月はニッコリし、三太郎は苦虫をかみつぶしたみたいな顔をしました。

10 腹黒サンタの罠！

クリスマスイブ。

正木正直くんはアパートで一人で夕飯を食べ、一人で布団に入って寝ました。お父さんもお母さんも夜遅くまでお仕事で、正木家のクリスマスは3日後の月曜日までおあずけです。

あーあ…、つまないクリスマスイブだなあ…、でいーえす欲しいなあ…、でも今年もプレゼントは2000円の図書カードだろうなあ…、ゲーム面白かったなあ…またやりたいなあ…、あーあ………

と、マサキくんは布団の中でため息ばかりついていました。なかなか寝つけず、寝返りばかり打っていると、カーテン越しに窓の外から赤青黄色にチカチカ点滅する光がさしました。ここはエレベーターのないアパートの4階の部屋です。マサキくんが信号機のお化けかななんて思っていると、ガラガラ窓が開いて、カーテンがめくられました。マサキくんはびっくりしてとびおき、どろぼうだ！どうしよう！？とあたふたしました。

「メリークリスマス！」

やあ！と元気に手をつきだして黒い帽子に黒いドレスを着た女の子が入ってきました。

「あつ、君は！？」

女の子はマサキくんにでいーえすをくれた子でした。マサキくんはいつの間に眠ってしまったんだろうと思いました。

「夢じゃないけど夢なんだよぉ？ おめでとうございまーす、あなたは黒サンタの月世界遊園地ご招待に当選されました！ さあ、どうぞサンタのソリにお乗りくださいーい」

美月にさあ！と窓をさししめされて、マサキくんはおっかなびっくり窓の外を見ました。

「よお。メリークリスマス」

赤青黄色の電球に飾られた屋根のない大きな黒い車が宙に浮いていました。その運転席で黒いコートを着たでっかい角張った黒岩三太郎がハンドルを握っています。

「ほら乗れよ。こいつで月まで一つ飛びだ」

マサキくんが空を見上げると、星空にでっかい満月が白銀に輝いていました。こんなに大きい満月を見たことありません。空飛ぶ自動車といい、これは夢にちがいないとマサキくんは安心しました。

「さあ乗って。今夜はクリスマススイブの特別な夜なのよ？ 夢の遊園地で思いっきり楽しみましょう！」

かわいい黒サンタにさそわれてマサキくんは嬉しくなつて「うん！」

と元気に返事をし、窓をまたいで、自動車の下から出ている翼に足をついて、後ろの座席に乗りました。となりに美月も乗り込んできました。

「先生！ レッツゴー！」

「よし。ロケットエンジン点火」

三太郎がハンドルを引くと車は上を向き、ボチツとボタンを押すと後ろでボンツとすごい音がして炎が噴き出し、ゴゴゴゴオオオオオオと、ものすごいスピードで天に昇りだし、町の灯が消えて周りが真っ暗になると、わあっと空の星の数が十倍にもなつてキラまぶしいくらい輝いて、真っ黒な宇宙にあわいミルク色の帯、天の川が現れました。プラネタリウムで見るよりすごい星空にマサキくんは口をポカンと開けてしまいました。となりの美月に腕をつつかれてふりかえってみると、地球の真っ黒な陰の部分に日本列島の形で金色の光が輝き、丸い地球の西の方は太陽の光が残って青い海と白い雲があざやかに光って見えました。マサキくんは感動で胸一杯で、このまま目がさめてしまっても悔いはないように思いましたが、

「じきに到着だぞ」

と言われて前を向くと銀色の月が目の前いっぱい広がって、ま

るで激突しそうに大きく迫ってきて、と思うと岩の表面に細かな線の模様が見えてきました。こんな模様、図鑑やテレビでも見たことありません。ぐんぐん迫っていくと、それはどうやら高い壁でしきられた通路のようでした。

「そら到着だ。ご乗車ありがとうございますーっと」

ボヨン！と後ろの座席のクッションが弾んで、マサキくと美月は宙に放り出され、「わー！」「きゃー」と悲鳴を上げて白い地面に落下していきました。二人は丸い広場に落ちていき、下からエアが吹き上げてふわりと着地しました。

空に浮かんだリムジンカーから三太郎が笑い声と共に言いました。「サンタランドご自慢の『月まるごとラビリンス』によっこそだ。

空から見たとおり月の表面全部に迷路がはりめぐらせてある。ゴールはそのちょうど裏だ。分かりやすくていいだろう？ そうだな、迷路をクリアするのに……100年くらいかかるかなあ？ まあ夢の中から死にやあしねえから、ま、たぐっつぷり、楽しんでくれたまえな。わはははは」

「ちよつとセンセえーっ！ー！ー！」

美月は怒ってぶんぶん腕を振り回して上にさげびました。

「どういつつもりよ！？ 一晩夢の遊園地で楽しく遊ぶんじゃないかな？ たのお！？」

「だから迷路を楽しめよ？」

「ゴールまで100年もかかる迷路なんて楽しいわけないでしょう！？」

「うっむ、そうなんだよなあ？？」

三太郎は下をのぞき込んで、あごに手を当てわざとらしくウンウンうなずいて言いました。

「まったくサンタランドのアミューズメント担当サンタどももバカな物を作ったもんだよなあ？ 80年代バブルの時代の産物でな、作ったはいいが、誰一人クリアできた者がいないんじゃないかな、すっかりお客なんていなくなっちゃった。ま、おまえらが最初のゴール

テープを切って伝説の勇者になってくれや」

美月はプンプン怒ってますます腕をぐるぐるふり回しました。

「冗談じゃないわよ！ もう~~~~！怒った！！！！ぜーったいサ
ンタ事務局に訴えてやるうつー！！！」

三太郎は悪い顔でニヤリと笑いました。

「ああいいぜ。どうぞ訴えてくれ、100年後にな」

「な、……なんですって？……」

美月は腕をふり回すのをやめて信じられない顔で三太郎を見つめました。

「嘘でしょ？ 本気でわたしたちをここに置き去りにするつもりじゃあ……………」

「それでは諸君らの健闘をいのる」

三太郎はピツと戦闘機のパイロットのように敬礼して、ニヤツと笑うとロケットエンジンを噴かしてあつと言つ間に地球向かって消えていきました。

11 ラビリンス！

「ど、どうしよう……」

美月はどうしたらいいか分からずすっかり気持ちが落ち込んでしまいました。マサキくんが考えて言いました。

「ここは夢の中の月なんだろう？ 本物の月に迷路なんてないもん」

「そうなんでしょうねえ」

「じゃあやつぱり僕たちは夢を見ているってことだね？ 寝ている本当の僕がお母さんに起こされるか、もし100年たったとしても、本当は一晩の夢ってことになるんじゃないかなあ？」

「うっ……ん、そう……なのかなあ？」

美月はそうならなんで三太郎は自分を迷路に閉じこめるようなことをしたのだろう？と考えましたが、三太郎が意地悪をして喜んでいるのだろうと思ってムカムカしてきました。

「とにかく迷路に挑戦する以外ないようだよ？」

マサキくんに言われて美月もよしっ！と気合いを入れました。

「やったるーじゃない！ 100年迷路をクリアして、あの黒ひげ親父をギャフンと言わせてやる……！」

「じゃあ、がんばろうね？」

「よーし、レッツゴー……！！！」

美月は腕をふりあげ、二人は迷路に入っていきました。

迷路の壁は二人の背の倍以上あってとてもよじ登って周りを見ることなどできそうもありませんでしたが、月は地球の4分の1の重力しかないのでふつうよりうんと高くジャンプすることができました。それでも壁の上までジャンプすることはできませんでした。マサキくんが手を組んで、バレーボールのトスを上げるようりで美月を上高く放り上げると美月はビューンと高く飛び上がり、

壁の上に着地することができました。マサキくんもすーぱーまりお兄弟の壁上りのようりで幅2メートルの間を忍者のように左右の壁を交互にけって上に登っていき、壁の上に到着しました。30センチの幅の上に立った二人は周りを見渡して思わずポカーンと口を開けてしまいました。見渡すかぎりの迷路の壁がっつらなっていてここを100年も歩き続けるなんて、考えただけで気が遠くなってしまう。二人は思わずいっしょに「ハアア~~~~~」と深いため息をついてしまいました。

「とにかく、歩こうか？」

「そうね」

二人は壁の上を歩いていきました。ずいぶん高いですが、体が軽いので怖くはありません。しかししばらくすると向こうの方から何か飛んできました。ブーンと羽ばたいてやってきたのは大きなミツバチのモンスターでした。モンスターはお尻を向けるとプシュン！プシュン！と針を発射して二人を攻撃してきました。

「うわっ、わあーっ！」

二人はたまらず壁の上から落下しました。

「いったー……くはないけど、なんなのよあいつ~~~~」

ミツバチモンスターはブンブン飛び回り、しばらくするとどこかに飛んでいきました。

「どうやらズルしないように見張っているようだね？」

二人は仕方なく地面を歩いていきましたが、さっそく分かれ道に出会って、てきとうに一方を選んでしばらく行くとまた分かれ道があり、一方を選んで進んでいくと行き止まりになってしまいました。「なんなのよ~~~~！ こんなのがえんえん続くってわけ~~~~！？」

美月はキーーーーッ！と怒って帽子をかきむしりました。マサキくんはため息をつき、

「とにかく進まなくちゃ」

と前の分かれ道に戻りました。こっちも行き止まりだったらどう

しようと思いつながら進んでいくと、今度はまっすぐ道が続いています。ところが歩いていくとまた左右の道が見えてきてげんなりしてしまいました。

近づいていくと、左の道から人が現れて二人はびっくりしました。
「わっ！」

と現れた人も二人を見てびっくりしましたが、

「あつ、おまえショウジキじゃん！」

それはゲームで遊んでいたグループの一人でした。

「コウタくん。なんで君がいるの？」

マサキくんがきくとコウタはぶ然として言いました。

「おまえこそなんでオレの夢に出てくんだよう、ムカツクなあ」

と言いつつ、コウタはへへつと笑いました。

「まあいいや、おまえみたいなんでもいないよりはましか。ついでにむかつくインチキ女もおっ」

「なんですってえっ！」

と美月は怒りましたが、コウタはへへつと笑いました。

「夜寝てたらよー、黒いクマみたいにでっけー親父に誘拐されて空飛ぶ車でこの迷路の中におっことされたんだよ。あいつ、おめえの父ちゃんだろう？」

「お父さんじゃないわよ。わたしの先生の、黒いサンタクロースよ」

「黒いサンタクロースう？」

「そうよ。あんたが友だちに意地悪する悪い子だからおしおきされてんのよ」

「じゃあおまえらも悪い子でおしおきされてんのか？」

「……………」

美月は腕を組んでむっつり黙り込みました。と、そこへ、

「あつ！　おい、おい！」

右の通路から手をふって二人の男の子たちが走ってきました。

「イチロウ！　コマツ！」

コウタは走ってきた二人と腕を組んで夢の中の再会を喜び合いま

した。仲間に入れないマサキくんはちよつと寂しそうです。

「おまえらも黒いサンタに誘拐されてきたのか？」

「黒いサンタ？ 子どもの夢を食べる悪魔じゃないのか？」

三太郎はどう見てもよい子の味方のサンタクロースには見えないでしょうね。

「よし！ 俺たち三人揃えば最強だぜ！ こんなダンジョン、軽く突破してやるぜ！」

意気ようようガッツポーズを取る三人に美月は意地悪に言いまして。

「この迷路クリアするのに100年かかるってさあ〜？」

「ひゃ、100年ん〜っ！！？？」

三人は予想以上の巨大ダンジョンに悲鳴を上げ、美月は意地悪に笑いながら、自分だってうんざりしてため息をつきました。

12 コスプレ！

コウタ、イチロウ、コマツの三人はでーえすゲーム機を持ってきたいました。

「なんで夢の中にまで持ってきてんのよー？」

と美月は文句を言いましたが、コウタは

「知らねーよ、ポケットに勝手に入っていたんだよ」

と言いました。ちなみに美月以外の男の子たち全員はパジャマを着ていて、はだしです。月の表面はサラサラした砂で、はだしで歩いていてもぜんぜん痛くありません。

「あー、ちくしょう、疲れた。休もうぜ」

もうどれくらい歩いたのでしょうか、空の上の青い三日月の地球はぜんぜん変わらず、ここには時間を示す物は何もなく、これじゃあ1日たとうが2日たとうが、1週間たとうが1ヶ月たとうが、1年たとうが2年たとうが、10年たとうが100年たとうがまるで分かりません。しかもゴールの見えない迷路を歩き続けるのはとてもなく退屈で、気ばかりイライラして、ものすごく時間が長く感じられます。

「やめだやめだ。休んで、ゲームやろうぜ？」

コウタたちは壁に寄りかかって座りこみ、三人ででーえすを開いてゲームを始めようとしていました。

「ちつくしよー、モンスターバトラーのデータ、どつかのインチキねーちゃんにぶっこわれちまったんだよねあ〜」

コウタはいやみったらしく文句を言って美月をにらみ、ディスプレイでゲームを呼び出そうとしていましたが、

「あれ？　なんか知らねーのが入ってるぞ？」

「MOONMAZE^{ムーンメイズ}」というスイッチが追加されていて、タッチすると、丸いわくの中に迷路が現れました。その真ん中の通路に濃い青い点と水色の点が二つ、灯っています。

「なあ、これって？」

三人は顔を見合わせ、自分のでいーえすを見せ合いました。

「やっぱこの迷路じゃねえか？」

「この先に広場があるみたいだぞ？」

「よし、たしかめようぜ？」

三人は元気に立ち上がり、でいーえすを見ながら走り出しました。
「待ちなさいよー」

美月とマサキくんも後を追って走りました。

「あつ、広場だ！ やっぱこの迷路が映ってるんだぜ？」

「すっげー、じゃあこれリーダーじゃん？」

「あつ、お菓子の木だ！ でいーえすのステーションもあるぞ！」

男の子たちは大喜びで広場の中央にあるモミの木に駆け寄り、枝からチョコバーやこあらのみーちを取ってボリボリ食べ、ステーションにでいーえすを通信接続しました。

「セーブしますか？ だつてさ。じゃ、先の迷路で迷ったらここに自動的に戻ってこられるってことかな？」

「コスチュームチェンジってのがあるぜ？」

コウタがボタンをタッチすると、ビュンン…、とかっこいい効果音が鳴ってパジャマからゲームのキャラクターのコスチュームに変身しました。

「あつ！ やつりーー！ 炎戦士レッドバロンだぜ！！」

コウタは大喜びで腰から剣を抜いてシュッシュッと技をくり出すポーズを決めました。オレもオレもとイチロウとコマツもボタンにタッチして変身しました。

「オレは水戦士ソードフィッシャーだぜ！」

「オレは土戦士ダイハードブロッケンだぜ！」

二人ともゲームのキャラになりきって大盛り上がりです。

「おもしろいぞこれ！ この先ぜったいバトルするモンスターが出てくるんだぜ！？」

「よっしゃー！ 燃えてきたあー！」

「よし、早く行ってモンスターやつつけて経験値上げようぜ！」

オー！と三人は盛り上がって、左手に装着したでいーえすレーダーを見ながら迷路の先へ飛び込んでいきました。

「こらー！ 待ちなさいよー！！」

美月とマサキくんは走って三人を追いかけてました。

「なんなのよこれえ！ なーんで夢の中まであいつらだけあんないい思いをしてるわけ！？」

美月はカッパと怒り、マサキくんは走りながらがっかりした寂しい顔をしています。

「おっ、待て！」

先頭を走るコウタがでいーえすレーダーを見て立ち止まりました。

「この先の広場にでかい赤い点があるぞ？」

「ああ。きつとモンスターだぞ！」

「よし、気合い入れていこうぜ」

三人は慎重に様子をうかがいながら広場へ入っていきました。野球の内野くらいの広さの丸い広場ですが、がらんとして何もありません。

「おかしいな、何もないぞ？」

「いや待て、下だ！」

ゴゴゴゴゴ、と地面が鳴って、バリバリ地面を裂いて子どもたちの3倍も背がある怪獣が現れました。

「よい獣ジライアンだ！？」

怪獣は巨大なアルマジロみたいなやつで、凶暴そうな目と、とがった牙をして、しっぽの先にとげとげの鉄の玉をくつつけていました。男の子たちは顔を青くして震え上がりました。

「いきなりレベル25の強敵じゃん！？ オレたちレベル3からのスタートだぞ！？」

「ちつくしょう、本当ならレベル33まで成長してたのにいつ」

コウタたちは後ろから駆けてきて巨大モンスターにびっくりしている美月とマサキくんをうらめしそうににらみました。

「コウタ、やべえよ、こんなの勝てっこねえよ、戻って別の道に行こうぜ?」

「ちくしょー…。いや、やろうぜ! どうせさっきセーブしたばっかじゃん? こいつで俺たちの強さを試してみようぜ?」

「うーん、やるか?」

「よっしゃあ、行くぜ!」

三人は武器をかまえてモンスターにバトルをいどんでいきました。

13 勇者！

「うわあっ！」

ドッカーン！とよろい獣の大きな固いこぶしにパンチされてコウタは壁にたたきつけられました。シヨックの割りには痛くありませんが、ダメージを受けると視界の上にゲージが現れて残りヒットポイントが表示されました。イチロウもコマツも次々ふつとばされてダメージを受けました。

「だめだあ、やっぱりレベルが違いすぎる！」

「ちつくしょう、悔しいぜ」

「退却だあ！」

三人は元の通路に逃げ帰りました。よろい獣ジライアンが激しく炎を吐き出しました。

「うわああっ」

三人はダメージを受けて急激にヒットポイントが下がっていきました。

「きゃあっ！」

通路で見ていた美月はモンスターの炎をまともに浴びて悲鳴を上げましたが、

「あら？ ぜんぜん熱くない」

3D映画で目の前に炎が迫ってきたようなもので、触ってもぜんぜん平気です。

「あはははは、なーんだ、バトルゲームに参加してない人はぜんぜん関係ないんだ？」

美月は炎を浴びてすっかり体が重くなってへばっている三人を見て大笑いしました。

「ほらほら頑張れ戦士たちい！ だらしないぞお？」

美月は笑いながらマサキくんに言いました。

「ほらあ、君もかっこわるい戦士たちを応援してあげなよお？」

マサキくんは両方の拳を握りしめて

「がんばれえっ！」

と大声を上げました。そして、

「ああ悔しいなあ、僕もモンスターとバトルしたいなあ」

と本当に悔しそうに言いました。すると、空でキラッと星が光って何かヒューンと落ちてきて、コッソンと美月の帽子の頭をたたきました。

「イッターイ！ 何よこれ？」

帽子をクッションにして着地したのはシルバーブラック仕様のでいーえすでした。それを見つけてマサキくんは、

「貸して！」

とうばい取るようにし、ゲーム機を開き、パワーをオンにしました。

「あつた！」

叫ぶとボタンをタッチし、すると、ビュワワワン……、と効果音が鳴り響き、マサキくんのパジャマ姿が黄金に輝くと、なんと、かつこいいドラゴン大帝アルテミランのコスチュームに変身しました。

ドラゴン大帝のマサキくんは大きな剣をビュン！とふるい、大きくジャンプしてよい獣に斬りつけました。虹色の火花がスパークし、よい獣は悲鳴を上げて後退しました。

「すっげー、かつちよいいー」

ゲームマニアの三人は悔しいのも忘れてドラゴン大帝のかつこよさに目をキラキラさせました。その三人の前に青い光の玉が現れました。

「ラッキー、エナジーボールだ！」

三人が光の玉をつかむとヒットポイントのゲージが満タンになりました。

「よっしゃー！ オレたちもリベンジだぜ！」

復活したコウタたちは強力な味方を得てすっかり元気になり、再

びバトルを挑んでいきました。

「炎斬り！」

「ウォーターカッター！」

「岩石アタック！」

それぞれ必殺技でよろい獣を攻撃し、

「怒りの鉄十字！」

マサキくんがとどめを刺し、

「ギャオーーーーーッ」

よろい獣はだんまつまの叫びを上げてドツカーン！と大爆発しました。

もうもうとした煙の中でピカツと光り、お菓子の木とでいーえすステーションが現れました。

コウタたちの前に経験値のゲージが現れ、ぐんぐんグラフが上がりました。

「やった、一気にレベル8だ！」

コウタたち三人は大喜びで盛り上がりました。でもマサキくんの目の前には何も現れません。

「僕はなんにも出ないよ？」

「あつたりめーじゃん」

コウタたちが笑いながら言いました。

「ドラゴン大帝なんて最強レベル99の最強キャラじゃん？ それ以上強くなるわけねーだろ？」

「ああ、そうか」

マサキくんも笑いしましたが、ちよつとつまらなそうでした。

「おまえいいなあ、ずるいな、かつこよすぎじゃん？」

コウタたちはマサキくんを取り囲んで笑いながらうらやましそうにしました。

「よし！ ドラゴン大帝が味方ならオレたちは無敵だぜ！ 行こうぜマサキ！」

「お…、オー！」

男の子たちは元気に拳をふりあげ新しく出現した通路に走っていききました。

「ったくもー、ガキどもが」

美月はお菓子の木から適当にお菓子をもぎとって

「待ちなさいよー!」

と男の子たちを追いかけました。

14 アタックチャンス！

「オリヤ、タアツ、トリヤアツ！」

と、男の子たちはバトルをくり返し、コウタたち三人はどんどんレベルを上げていきました。男の子たちは夢中になっていましたが、迷路は果てしなく、食べ物はお菓子ばかりで、美味しいのですが、あきてしまいましたし、バトルに夢中の男の子たちもいいかげん疲れてしまいました。

「あ~~~~、も~~やんなっちゃった~~~~」

「お菓子じゃなくてカツ丼くいてえ~~~~」

「オレ、カレーライスう~~~~」

と、だんだん歩くのがだらだらしてきて、文句が多くなってきました。ここに来てから……せいぜい4、5時間くらいでしょうか？美月は腰に手を当て、とてもこいつらと100年いっしょになんてられないわね、と思いました。

マサキくんがリーダーを見ながら言いました。

「この先にすごく大きい広場があるよ？」

他の三人もリーダーを見て、

「ああそうだな。このエリアのボスキャラが待ってるんじゃないか？ま、こっちはドラゴン大帝さえいれば楽勝だけだな」

と、もうあんまりやる気がなさそうに言いました。

その広場の入り口に近づいてくると、これまでのふつうの道の分かれ道とは違っていました。入り口に黒いバニーガールのお姉さんが立っていたのです。

「ハア〜イ、みなさん、月のラビリンスは楽しんでくれていますかあ？」

黒ウサギのお姉さんは金髪で青い瞳の、ボインで脚の長いナイスバディーです。男の子たちはみんな思わず真っ赤になりました。

「ここでビッグチャンスでえーす！ジャジャジャー！この

先にラビリンス最強のラスボスが待ちかまえてまあす！ この！、ラストボスを！、やつつけるとお！、ジャジャジャー！ なーんと！ゴールまで直行のスーパージェットフライヤーに乗ることができまあすっ！！」

なあーんだ、とコウタたちは安心しました。

「じゃあさつさとやつつけてゴールしようぜ？ オレたちには最強のドラゴン帝王がいるんだもん、楽勝楽勝」

「チャレンジしますかあ？」

「もち。バトルするぜ！」

「それではどうぞお、頑張ってくださいあい！」

黒バニーに道を示されてコウタたちは通路に入っていました。マサキくんも心配そうにしながら続けました。美月は黒バニーのお姉さんにききました。

「ねえ、ここってぜんぜんお客がないんじゃないの？」

「今日はあなたたちの貸し切りよ？」

「ふうーん、そうなんだあ……」

美月もマサキくんの後に続いて通路を歩きながら、100年かかるなんて、黒岩先生よくもだましたわね！と腹が立ちました。でもどうやらこれでゴールできそうで安心しました。

通路の先の広場は、これまでのただの広場と違って豪華なスタジアムになっていました。周りの階段状の客席には月のウサギたち……バニーガールのお姉さんたちが、何千人もヒューヒュー口笛を鳴らし、華やかな歓声を上げ、挑戦者の男の子たちをむかえました。

スピーカーから入り口で案内したお姉さんの声が響きました。

『バニーズ・アーンド・ジェントルボーイズ！ ウェルカム・トゥ・ザ・バトルスタジアム！』

ヒア！ カミントウザ・モストパワフル・ストロング・クリーチャー・オブ・ザ・ワールド！

バーバリアンキング・オブ・ザ・ラビリンス！

ヒアカム！ ザ・ジャイアント・ミノタウローン！！！！」

ワーー！ キャー！、とバニーお姉さんたちが騒ぎ、グラウンドの中央から巨大な黒いオリが現れ、同時に観客席の前に鋼鉄のさくが高々と上がっていきました。オリの中にいるモンスターを見て男の子たちはブルツと震えて青くなりました。今まで闘ってきたどのモンスターよりも巨大で凶暴そうな、大きなバツファローの頭にゴリラの体をしたモンスターが手足に鋼鉄の鎖のつながった輪をはめられていました。目を血走らせ口からだらだらよだれをたらして思いつき怒っているようです。

「じゃ、ジャイアント・ミノタウロンだって……」

「だ、だいじょうぶだよな？ な、なんてったってオレたちにはドラゴン大帝がついてるんだもん？ な？」

「う、うん……………」

ドラゴン大帝のマサキくんは青い顔で自信なさそうにうなずきました。

『レディー……、バトル！』

ガラガラガラ、と大きな重い音を立ててモンスターの入れられたオリが下がっていきました。モンスターはきゅくつなオリから手足を伸ばし、

「ウオオオオオー……ッッ！」

とものすごい声で吠えると、腕を伸ばして戦士たちをつかまえようとしました。しかし床につながれた鎖が伸びきってギリギリで届きませんでした。それでも驚いて飛びのいた四人は

「あ、あつぶねえ……」

と肝を冷やしました。

「こいつのリーチはここまでだ！ 無理しないでビーム攻撃で化物のライフを削っていくんだ！」

四人はグラウンドの外側ギリギリのところを四方に散って炎、水、石、雷の技で遠くからモンスターを攻撃しました。攻撃がきいているのかどうか分かりませんが、モンスターは戦士たちをつかまえら

れずに怒って吠えまくりました。

遠くから攻撃してばかりの四人に客席のバニーガールたちから「ブーブー」とブーイングがおきました。

怒り狂うモンスターはブン！とバツファローの頭をふりました。すると毛が飛んで、数十本の太い針になって炎戦士コウタを襲いました。

「うわあっ！」

ガガガガンツ！とよろいを矢のような針に打たれてコウタは吹っ飛ばされ、客席の鋼鉄のさくに激突しました。ひどいダメージにヒットポイントが一気に半分下がりました。客席のバニーお姉さんたちはキヤーキヤー大喜びです。

モンスターは巨大な体でジャンプするとふり上げた二つの拳を地面にたたきつけました。ドンツツッ！！！とものすごい衝撃波がグラウンド全体を下からつき上げて、4人の戦士は悲鳴を上げて宙に弾き上げられました。ヒットポイントのゲージが表示され、ぐんぐん下がっていき、これまで一度もダメージを受けなかったドラゴン大帝のマサキくんもはじめてゲージが現れ50もポイントが下がってしまいました。もっともドラゴン大帝のヒットポイントは500もあるので平気ですが、他の三人は100ずつ下がって、しかも彼らは500くらいしかヒットポイントがありませんのでダメージは深刻です。先に針攻撃を受けたコウタはもう残り200を切ってしまいました。

モンスターの衝撃波のあおりで座席から飛び上がったバニーお姉さんたちは激しいバトルに興奮してキヤーキヤー大喜びしています。やれー！やっつけちゃえーっ！なんて大声でモンスターに声援を送っています。さすが黒バニーです。スピーカーからまたお姉さんの声がしました。

「あっあー、言い忘れてましたが、

この特別ステージでヒットポイントがゼロになるとここまでのセーブポイントがすべて無効になり、経験値もゼロになり初期値で自

動的にスタート地点にワープして、最初からやり直しになります。これはチームが勝ってもヒットポイントがゼロになった人は復活することなく、チームから脱落することになりますので、戦士の皆さん、仲間のことなんてとりあえずほうつといて、まずは自分が生き残るようにせいぜい頑張ってくださいあゝい！」

四人はびっくりしました。通路でさくの後ろから観戦している美月もびっくりして思わず大声で抗議しました。

「そんなあー！ バトルが始まってからそんなこと言うなんて卑怯よおっ！！！」

でもスタジアムは大盛り上がりで、美月の声などぜんぜん誰も聞いてません。

モンスターはギロリとダメージを受けて弱っているコウタをにらみました。弱い者から先にやっつけてバトルから消してしまうつもりです。モンスターは肩をそらして腕を後ろにかまえると、ブンツツッ！、とものすごい勢いでコウタ向けてパンチをくり出しました。コウタまで拳は届きませんが、ものすごいパンチの衝撃が空気の大砲となってコウタを襲いました。ドッカーン！と弾き飛ばされてコウタは

「うわああああっ」

と悲鳴を上げました。

15 ヲアィナルバトル！

壁に激突したコウタはヒットポイントのゲージが現れ、一気に150もポイントが減って、残りが40になってしまいました。もう1回でも何か攻撃を受けたらアウトです。客席からヒューヒュー！と興奮した口笛と歓声が上がりました。

「やっちゃえー！ やっつけちゃえー！」

黒バニーたちは手を振り上げて大興奮です。……日頃よっぽどストレスがたまっているのでしょうか？……

「危ない！ コウタを守るんだ！」

マサキさんとイチロウ、コマツは慌ててコウタのところへ駆け寄ろうとしました。すると奥からフィールドの中に入ってつつきろうとしたマサキくんはモンスターの巨大な手にまともになぐられて吹っ飛ばされました。

「わああっ！！！」

マサキくんは恐怖の悲鳴を上げて、ゲージが300も減ってしまいました。

モンスターはパンチをくり出しコウタを始末しようとした。

「シールド！」

コウタを守ってイチロウとコマツが盾をかまえて防御しましたが、ドッカーンと跳ね飛ばされ、うわあと悲鳴を上げ、二人とも100ずつダメージを受けました。なんとかコウタを守りましたが、これでは三人ともやられてしまうのは時間の問題です。コウタは立ち上がり二人に言いました。

「オレはもう駄目だ。おまえら逃げて、あいつの攻略法を考えろ！」
「バーカ」

イチロウとコマツはコウタを振り返って笑いました。

「今のオレたちあのバケモノに勝てるかよ？ あーあ、ちっくしよう、完全なデストラップだったな？」

「ひつきよーだよなー？ あーあ、三人揃ってスタートからやり直しかよ。くっそー、腹立つなあ」

モンスターは完全に勝利を確信してキヤーキヤー歓声を上げるバニーのお姉さんたちにガッツポーズを取ってうおおーっとう吠えています。

マサキくんが三人のもとに駆けつけました。

「回復しなくちゃコウタくんが危ないね？」

「エナジーボールを出現させるためには敵に攻撃をクリーンヒットさせなきゃ駄目だろ？ 下手にリーチの中に飛び込んでこっちがクリーンヒットされたら、ドラゴン帝王でもひん死のダメージを受けるぞ？」

それはさっきぶん殴られてマサキくんもよく分かっていました。が、真剣な顔で三人に言いました。

「でも僕だつてとてもあんな怪物に勝てないよ。みんなでいっしょに戦って、やられるんなら四人いっしょにスタートからやりなおそうよ？」

イチロウとコマツがうなずきました。

「そうだな。少しでもあいつにダメージを与えられそうなのはマサキだけだな。オレたちであいつの隙をつくって、マサキに攻撃を任せようぜ」

コウタもよし！とうなずきました。

「マサキ。あいつに死角はないぞ？ ああいう奴は真っ正面からまっすぐ攻撃するんだ、かいしんの一撃がやすいぞ？ でかい顔して目と目の間があいてるから、大ジャンプして思いつきり剣を打ち込むんだ！ マサキ。頼んだぜ！！」

マサキくんは緊張しながら力強くうなずきました。イチロウが言いました。

「おまえは後ろに回ってタイミングを待て。オレたちがチャンスを作ってやるから、見逃すなよ？」

マサキくんはうなずき、

「よし！ レッツ・バトル！」

「オウツ！！！！」

と、かけ声を合わせると、マサキくんは壁沿いにモンスターの後ろに向かって走りました。ガッツポーズを取って吠えていたモンスターが気づいてマサキくんを追おうとしました。

「おまえの相手はオレだあ！」

イチロウが反対に走って

「ウォーターカッター！」

水の刃で攻撃しました。モンスターは怒ってイチロウに吠え立て、
「こつちも忘れんなよ、炎斬り！」

コウタも剣をふって炎を飛ばして攻撃しました。モンスターは怒り狂い、体を反らすと、

「カアッ！」

と、口から衝撃波を吐き出しました。そんな攻撃予想もしてなかったコウタはギクツとして逃げるのが遅れました。

「ダイハードブロック！」

コウタの前に飛び込んだコマツが全身を岩にして衝撃波を受けコウタを守りました。頑丈な土戦士の最大防御技も最強モンスターの攻撃をまともに受けて80のダメージを受けました。黒バニーたちはコウタをしとめ損なったモンスターにぶーぶーイングしました。コマツは歯を食いしばり、コウタを振り返って言いました。

「あんまり無茶すんなよ？ 一人でも欠けたらオレたちの負けだ！」

「悪い、油断した。サンキュー」

二人はニヤリと笑い、油断なくモンスターをにらみました。

「ウリヤアッ！」

ジャンプしたイチロウがモンスターの肩に斬りかかりました。モンスターはよけることなく肩でタックルして振り下ろされた剣もろともイチロウを弾き飛ばしました。

「うわあああッ！」

イチロウは吹っ飛ばされて観客席のフェンスに激突しました。黒

「バーたちは大興奮です。」

「イチロウ！」

イチロウは一気に350のダメージを受けて残りヒットポイントが30になってしまいました。

「あいつも無茶しやがって……」

「いや、でも見る！」

斬られたモンスターの肩から小さな虹色の光のボールが現れてふわふわただよい出しました。

「エナジーボールが出た！ 攻撃がきいたぞ！」

コウタとコマツは現れた希望の光に歓声を上げました。イチロウもグラウンドに下りるとイエイツ！と盾を立ててガッツポーズしました。しかし状況はもはやギリギリです。

「エナジーボールが出ててもあいつのリーチ内じゃ取れないな。マサキに一発逆転を期待するしかねえな」

「最後の勝負だ、行くぜ！」

身軽なイチロウはフェンスに素早くよじ登り、力いっぱいの大ジャンプでモンスターの頭上をグラウンドの反対側へ飛びつつ、くると回転しながらウォーターカッターをくり出しました。モンスターがうるさく水の刃を振り払いつつイチロウを目で追うと、コマツの怪力で放り上げられたコウタがやはりモンスターの頭上を飛び越えつつ炎の剣で攻撃し、怒り狂ったモンスターが自分を追って吠えるのを確認し、

「マサキいつ！ 今だあつ！」

叫びました。着地してくるコウタと入れ替えにマサキくんがまっすぐ思いきり大ジャンプし、コウタを追って振り返ったモンスターの真っ正面に迫り、

「うおおおおおつ！！！！！」

思い切り大きな剣を振り下ろし、見事、モンスターの眉間に打ち込みました。

「ぎゃあああああつ！！！！！」

モンスターは額を押さえて悲鳴を上げ、パアッと大きな虹の玉がいくつも散らばりました。

「エナジーボールだ！」

コウタはジャンプして体でボールを受け止め、一気にヒットポイントを全回復しました。イチロウもコマツもエナジーボールをつかまえて回復し、

「いっけーっ！」

全力でどうの攻撃をしかけました。モンスターは攻撃を受けて暴れ回りましたが、ボンボン、エナジーボールを散らしました。

「マサキいーっ！！！！」

「うおおおおおっ！！！！！！」

マサキくんはドラゴン大帝の最大必殺技ドラゴングランドクロスを放ちました。真っ白な十字の光線がモンスターの体をつらぬき、モンスターは仁王立ちすると、ドッカーンッ！と虹色の大爆発を起こして消し飛んでしまいました。

経験値のゲージがぐるぐる回り、コウタ、イチロウ、コマツは、それぞれ炎、水、土のレベル99の最強戦士にレベルアップしました。

「やったー！！！！！！」

四人は駆け寄り、ハイタッチして大喜びしました。

16 空飛ぶ！

観客席の前に上がっていたさくが下りていき、黒バニーたちはスタンディングオベーションで四人のバトラーをたたえました。

モンスターが現れたグラウンドから台にのって銀色の翼のついたモーターボートがせり上がってきました。

『バトル勝利おめでとうございます！！！！ 賞品のスーパージェットフライヤーです！ これで月の裏側のゴールまで一つ飛び！おめでとうございましたあ、拍手うー！！！！！！』

黒バニーのお姉さんたちはせいっぱい大きな拍手で四人を祝福し、四人はニヤニヤ照れながらボートに乗り込みました。

ボートは四人乗りでした。

歩いてきた美月にマサキくんは言いました。

「美月さんも乗りなよ？ 詰めればだいじょうぶだよ」

『あつあー』と意地悪なアナウンスが言いました。

『ボートの定員は四人までです。人数をオーバーしますとバランスを崩して墜落、爆発、死亡事故の起こる危険がたいへん高いですのでお気をつけくださあーい』

美月は肩をすくめました。

「だってさ。あなたたちが勝ち取った賞品ですもの、どうぞ、四人でゴールしなさい」

「でも……」

「いいのいいの。わたしなんかあんなたたちのすることに文句を言っていただけだから」

「たしかにな」

と、コウタたちが笑いました。

「でもさあ……、本当にいいのか？」

「いいよ、平気だよ」

美月は周りを見渡して言いました。

「仲間がこれだけいるんだもの、わたしはサンタクロースなのよ？」
「黒サンタの見習いだろう？」

美月がむつつりして男の子たちは笑いました。

「それじゃあ念のため」

マサキくんは左腕に装着したでーえすのパワーをオフにしました。するとドラゴン大帝のコスチュームが消えて元のパジャマ姿に戻りました。

「これ、返すよ」

マサキくんからでーえすを受け取り、美月は言いました。

「別に持っていてもいいのに」

マサキくんは首をふりました。

「もったつぷり楽しんだよ。ゴールしたら、きっとこの夢は覚めちゃうんでしょ？ どうせ本当の世界には持っていけないから……」

コウタたちがマサキの肩をたたいて言いました。

「しょうがねえなあ、オレたちのでーえすを順番に貸してやるよ」

「そうそう、おまえはもうオレたちチームの一員だからな」

「またいつしよに組んでモンスター相手にバトルしようぜ？」

「うんっ！　ありがとう！」

マサキくんはニッコリ笑ってうなずきました。

コウタがハンドルを握りましたがどうやら完全な自動運転らしく、

「GO！」のボタンを押すとボートはふわりと浮き上がりました。

「バイバー……」

マサキくんが手をふる間もなく、ボートは後ろのジェットエンジンから炎を噴き出してバビューン……と、あっという間に空の向こうへ飛んでいってしまいました。

「さーて終わった終わった」

「帰ろうっ」と

観客の黒バニーのお姉さんたちは続々席を立ち、あちこちに開いている出口に入っていくきました。

「あつ、ねえーちよつとー、待ってよおー！」

美月は大声で呼びかけて壁に駆け寄りましたが、ぴよんぴよん飛んでも壁の上まで頭は届かず、入り口の通路に戻っても誰もスタジアムから出てくる様子はなく、取り囲む通路をぐるぐる歩きました。が中へ入る入り口はどこにも見つかりません。一周してスタジアムに戻ってくると、中はがらんとして、あれだけいたバーニーお姉さんたちがもうだれ一人残っていません。

「そんなあ……………」

美月はひとりぼっち立ち尽くしてぼう然としました。

美月はとぼとぼ迷路を歩きました。でーえすのレーダーを頼りに歩きましたが、広場に出てもモンスターは出てくることなく、美月はでーえすステーションでセーブだけして、お菓子を食べて休憩して、またとぼとぼ歩き出しました。こんなことなら無理してでも空飛ぶボートに乗せてもらうんだったと思いました。歩いてても歩いても迷路は果てしなく、意地悪に行き止まりもあつて、やっぱりふつうに歩いていたらゴールにたどり着くまで100年かかるんじゃないかと思いました。きつとぜんぶ黒岩三太郎は計画していたに違いありません。まさかと思いました。が本当に誰も自分をさがしに来てくれなかったらどうしようと思いました。いろいろケンカをしました。が、そんなに三太郎は自分が嫌いなんだろうか。と美月は思いました。

「うつ、うつ、……………うええ……………ん……………、ええ……………」

かわいそうに、美月はとうとう泣き出してしまいました。泣きながらひとり歩き続けました。

「ええ……………ん、ええ……………」

すると、頭の上から、シャンシャンシャンシャン、と、鈴の束が鳴る音が聞こえてきました。美月がぐすぐすと泣きながら見上げると、7頭のトナカイに引かれた空飛ぶソリが下りてきて、

美月の頭の上の少し先に止まりました。そこから赤い帽子をかぶった白ひげのサンタがふりかえって言いました。

「おや。子どもの泣き声がするから来てみれば、お嬢ちゃんは黒サンタかい？」

美月は腹立たしくて思わず大きな声で言いました。

「黒サンタなんて大嫌い！ わたしはサンタ見習いです！」

17 サンタクロース！

美月は赤サンタさんからサンタクロースの秘密道具「無重力ブーツ」を落としてもらって、ソリまでジャンプしてサンタさんとなりに乗せてもらいました。

「この辺りにサンタのおとずれる予定の子どもは他におらんからもう、地球に戻ってもかまわないかい？」

「どうぞ。北極のサンタランドまで連れていってください。事務局にわたしの先生の黒サンタのことを報告しなくちゃなりません！もう〜、ぜったい許さない！訴えて、ぜったいサンタクロースの資格を取り上げてもらうんだから！」

白ひげの赤サンタさんは「はい！」と声をかけてトナカイたちを地球に向かわせました。

「なるほど、するとやはりお嬢ちゃんが黒岩三太郎の生徒の村上美月ちゃんじゃな？」

「はい。？」

美月はなんで知っているのだろうと首をかしげました。サンタさんは優しい顔でニコニコ笑って言いました。

「それならサンタランドに行くのは夜が明けてからじゃな。村上美月くん。君は先生の採点の結果、黒サンタには不適格だと、黒サンタ見習いを失格になった」

ええっ！？と美月は驚きました。

「先生の採点って、黒岩三太郎先生のですか？」

「そうだよ。彼が君の先生じゃろうが？」

「そんなのおかしいですう！ あんな先生、でたらめです！！！！」
サンタさんはほっほっほ、と笑いました。

「あんなやつでもあいつは立派な黒いサンタクロースじゃよ。ま、悪い子の親玉じゃからのう、やり口はろくでもないがのう」

美月は納得がいかず不満です。

「どうしてそんな人がサントになれるんです？」

サントさんは愉快そうに言いました。

「いろいろな人間がいた方が世の中楽しいじゃろう？　いろいろな子どもたちがいるからろう、サントもいろいろなサントがおった方がいいんじゃないよ」

「はあ………」

美月はしぶしぶうなずいて、がっかりして言いました。

「それで、わたしは見習い失格になって、サントにはなれないんですね？」

「いや。おまえさんは赤サント見習いになることになって事務局からわしのところに通達が来た。というわけで、美月くん、君にはさつそく赤いサントクロースの仕事を手伝ってもらいますぞ？」

サントさんは香水瓶を取り出し、シュツと美月に噴きかけました。すると美月の黒い帽子とドレスが赤く変わりました。

「希望は黒サントだったようじゃが、赤サントでもいいかね？」

「はいっ！　よろしく願います！　赤サント先生！」

美月はサントクロースになれるのだと目をキラキラさせて喜びました。赤サントさんはニコニコして言いました。

「うむ。よろしく頼むよ。これで赤サントの仕事もなかなかハードで根性が必要だからろう。じゃが、サントクロースに一番必要なことは……、美月くんは子どもは好きかな？」

「はいっ！　大好きですっ！」

と、勢いで言ってから、美月はちよつと苦笑いを浮かべて言いました。

「やつぱり嫌いな悪い子もいますけど……」

ほっほっほ、とサントさんは笑いました。

「おそらく君が嫌いな悪い子のところには、赤いサントも黒いサントもおとずれることはないだろうから心配はいらんよ」

美月は安心して、近づいてくる地球の真っ黒な陰の中の眠らない街の灯をながめて思いました。黒岩三太郎先生はとんでもない黒サ

ンタでしたが、黒サンタ見習いもけっこう楽しかったな、と。そしてどうして自分は黒いサンタになりたかったのか考えましたが、なんだかもう忘れてしまいました。今はとても楽しい気分で、眠っている良い子の枕元にプレゼントを届けるのが楽しみです。サンタさんの後ろにはどつかと大きな白い袋が載っています。美月はとても楽しみなのですが、疲れて、眠くなってきたてしまいました。うつらうつらとする美月にサンタさんは優しく言いました。

「しばらく眠るといい。君も、楽しいクリスマスの夢を見るといい」
美月はニツコリ笑って目を閉じ、何か思いだしてクスクス笑い、眠りに落ちていきました。

クリスマスイブが明け、クリスマスの朝になりました。

マサキくんが目を覚ますと枕元に新品のでーえすの箱がモンスターバトルゲームのソフトとセットでありました。マサキくんは飛び起きて、箱をつかんでお父さんお母さんのところへ駆け込みました。

「お父さん！ お母さん！ プレゼントありがとう！」

お父さんはお母さんと目で合図しあい、とぼけて言いました。

「さあなあ？ お父さんとお母さんはおまえに図書カードを贈るつもりだったんだが……、どうやらサンタクロースが勝手にプレゼントを持ってきてしまったようだなあ？」

マサキくんは嬉しくてたまらず、ニヤニヤ笑いをこぼしながら言いました。

「サンタクロースなんて本当はただでプレゼントなんてくれないんだよ。自分のサンタがいる子どもにはね」

お父さんとお母さんはマサキくんのませた言い方に目を見合わせて笑いました。

「手洗いうがいして来なさい。ごはん食べるぞ」

「はい！」

マサキくんは元気に返事して、だいじに自分のでいーえすを部屋に持ち帰りました。マサキくんのでいーえすはブラックでした。マサキくんはコウタたちと遊ぶのが楽しみでしょうがありませんでした。

……おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4830p/>

黒いサンタと弟子入り娘

2010年12月23日20時40分発行